

画面構成研究-1

-セザンヌの視覚誘導と構成

平木 美鶴

内容目次

1. はじめに
2. 視覚誘導
 - 2-1.視覚誘導の作り方
 - 2-2.視覚誘導の応用
3. セザンヌの視覚誘導と構成
 - 3-1.作品「石膏像のある静物」より
 - 3-2.作品「黄色い椅子のセザンヌ婦人像」より
 - 3-3.作品「大水浴」より
4. おわりに

1.はじめに

画面構成とは、描かれる基底材であるキャンバスや紙などの限定された空間を区切っていくことであるが、区切り方によっては、それを見る者へ快、不快の感情を持たせる。そのことを簡単な図で示したのが図1-1と図1-2である。

図1-1は、三角形に区切られた形である。この構成は、底辺が大きいため安定感があり、安心して見る事ができる。

図1-2は、図1-1の三角形を逆にして画面を区切った形である。この構成は、三角形の頂点だけで支えられているため、いつ倒れてくるか分からない不安感や恐怖感があり、落ち着いて見る事ができない。

図1-1と図1-2の構成は、相反する感情を見る者に与えるが、この感情の根本には人間の生活における本能的な感覚が関係していると考えられる。

本能的な感覚で二つの構成を読み取るならば、図1-1には、人の営みを作り出す安定とやすらぎがある。しかし、日々の繰返しから生まれる退屈さが含まれる。

図1-2には、大きな物が倒れる事により身が危険な状態に置かれることを回避する防衛本能を働かせるが、人は、常に危険を避けるばかりではなく、好んで危険を侵すことで歴史的にも新しい発見をしてきた。そのような人間の新たな発展に欠かす事のできない冒険心が含まれている。

画面構成が人間に与える感情は、人が住む地域や宗教、習慣の違いがあろうとも地球という限定された環境下において同じ構造を持つ人間である共通性の中で成り立っていると考えられる。

画面構成をこのように人間の本能的感覚との関係で捕えなおし、平面作品の骨組みにもあたる構成を研究することによって実制作への応用や制作の基礎教育法の確立、より深い作品の鑑賞方法を

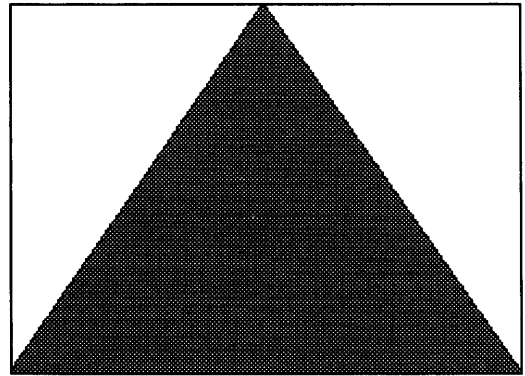


図1-1

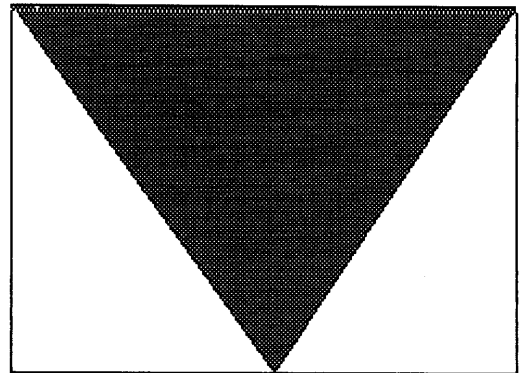


図1-2

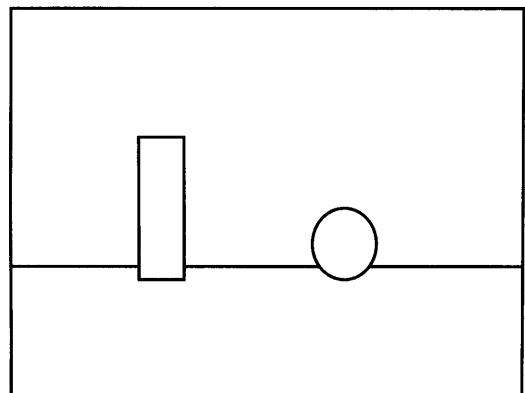


図2-1-1

作り出したいと考えている。

今回は、画面構成研究の一つとして不安定な構図から生まれる画面の力関係と緊張感のある視覚誘導や美しい流れを画面に作り出す視覚誘導、構成から生まれる感情的表現などについてセザンヌの作品を使い、考えてみたい。

2. 視覚誘導

2-1. 視覚誘導の作り方

視覚誘導とは、画面構成により鑑賞者の目を意図的に画面内で誘導することであるが、この方法を上手く使うことによって緊張感がありながら画面を安定させる事や心地よい流れのような動きを作り出す、画面を実際より大きく見せるなどの効果が得れる。

図2-1-1は、長方形と円形の物が水平な地の上にあり、どっしりとした安定感のある構成である。この状態を人間の生活に例えるならば普通の生活に近い状態と言えるであろう。それは、生活している中で何気なく求めている安定であり、平坦な道の上に立っている状態に例えることもできる。この図を見つめていると安らかで静かな気分になるが、それは眠くなるような退屈さも含まれている。

図2-1-2は、図2-1-1の水平な地を右に傾けることにより退屈さを取り除こうとした構成である。長方形や円形の物を人間に置き換えると坂道に立っている特殊な状況であり、この状態に人は長時間耐える事はできないであろう。感情の面から捕らえると緊張感はあるが不安感が強く、気持ちの苛立ちが生まれてくる。それは図2-1-3で描かれている矢印のように左から右下への動きが生まれたため、地に置いてある長方形や円形が画面の外に向かって転げ落ちていくような不安定な視覚の動きが作り出している感情である。

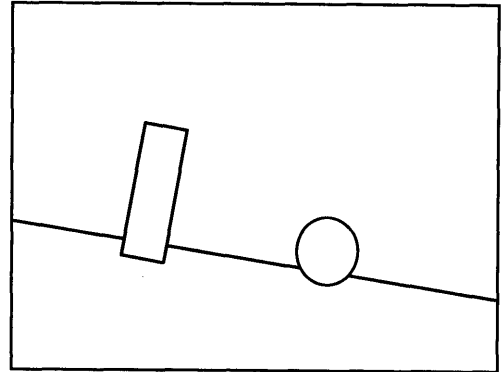


図2-1-2

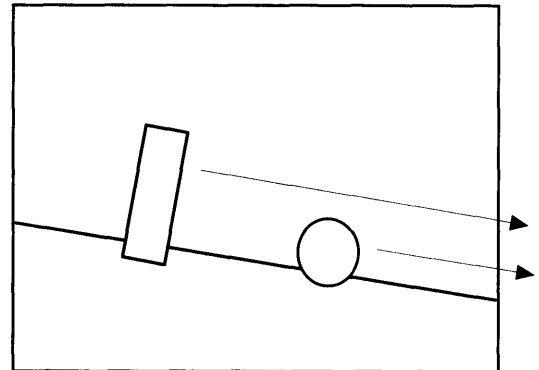


図2-1-3

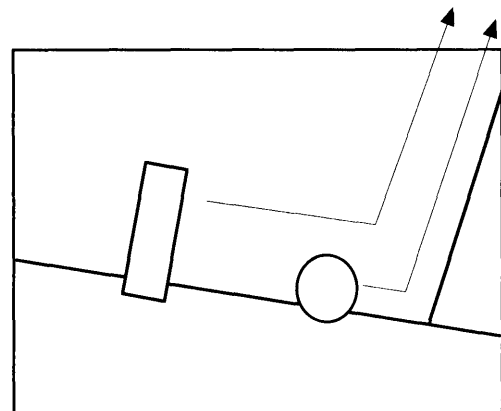


図2-1-4

図2-1-4は、図2-1-2の不安定さを解消するために右側に斜めの線を描くことで壁を作り、画面の外に向かって転げ落ちていく視覚の動きを止めた構成である。それは、右下への力=視覚の動きを受け止めると同時に、力=視覚の動きを右上画面外に出す。この動きを作ることで画面は、緊張感を持ちながらも安定してくる。また画面右上側の余白となっている空間に視覚の動きが加わることで長方形や円形の物と空間の関連性も生まれてくる。

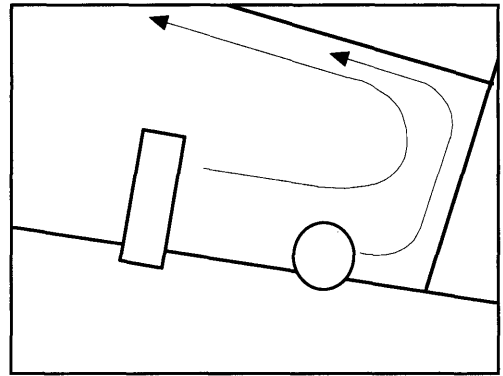


図2-1-5

図2-1-4で生まれた視覚の動きをより意識的に作り出しているのが、図2-1-5である。ここでは、右側の壁に天井を加えたのであるが、この天井は、右上の画面外に向かって視覚の動きを左上へ向ける役目を持ち、意識的に視覚の動きを誘導することで画面に横U字形の視覚誘導を作り出している。これは、図2-1-4より画面全体に長方形や円形の物を空間と関連づけている。

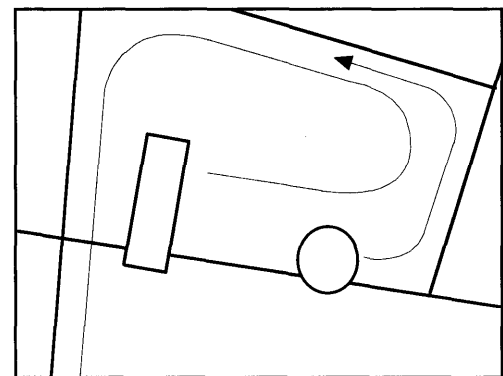


図2-1-6

図2-1-6は、左側に縦線を入れることで、左上に誘導された視覚の動きを画面下に誘導する役目を持っている。このことによって視覚の動きは、画面上で円を描き、画面全体と物が、関連性をより強く持つ事になる。画面は、緊張感を持ちながらも安定し、心地よい動きを作る構成となった。

図2-1-7は、視覚の誘導をまとめた図である。Aを入り口として視覚はアの地を伝わり、イの壁によって右上へ導かれ、ウの天井によって左上へ、エの線により左下へ導かれ、画面外Bに出ていく。このように入口から出口へ鑑賞者の視覚をスムーズに導くのが、視覚誘導である。

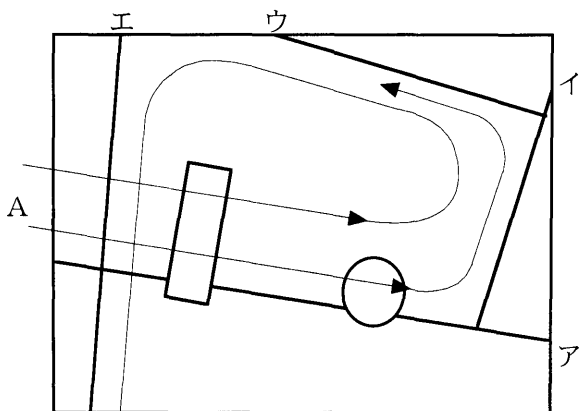


図2-1-7

2-2. 視覚誘導の応用

この視覚誘導を上手く使えば、画面構成の美しい動きを作りながら、空間と主題となる物との密接な関係を持たすことができる。また、画面構成

上の中心を自由に設定できる。

視覚誘導により、画面構成上の中心を作る場合、誘導線の交差が多い箇所ほど、目が引き付けられるため、二つの視覚誘導を作り、誘導線を絡ませる事で中心を作る事が考えられる。

簡単な作例としては、図2-2-1のように、U字形の曲線を絡ませた箇所が構成上の中心となる。その際、画面の中心に構成上の中心を持ってくると、画面の広がりが無くなるので注意が必要である。図2-2-2のように、交差する誘導線を画面の中心から外し、右下に設定し、左上の余白を生かすことにより、画面にのびやかさが作り出される。

U字形曲線以外の方法で、複雑に2つの視覚誘導を絡ませたのが、図2-2-3である。円を描く視覚誘導であるこの場合も大きな左側を導入口とした誘導と右側を導入口とした小さな誘導の交差した空間に目が引き寄せられて中心となる。

実際の作品の場合、図2-2-3のような円を描く誘導や図2-2-2のようなU字形曲線の誘導などが大小複雑に絡み合っている場合が多い。

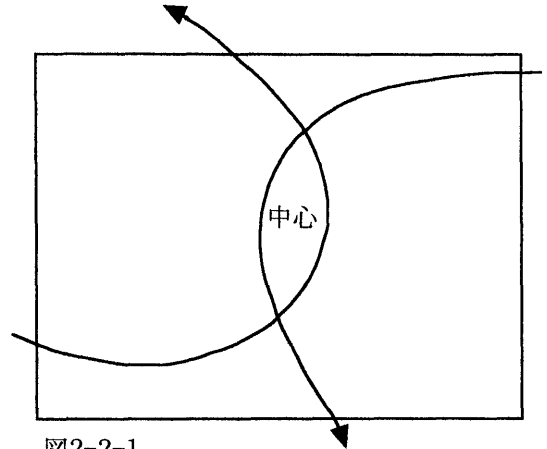


図2-2-1

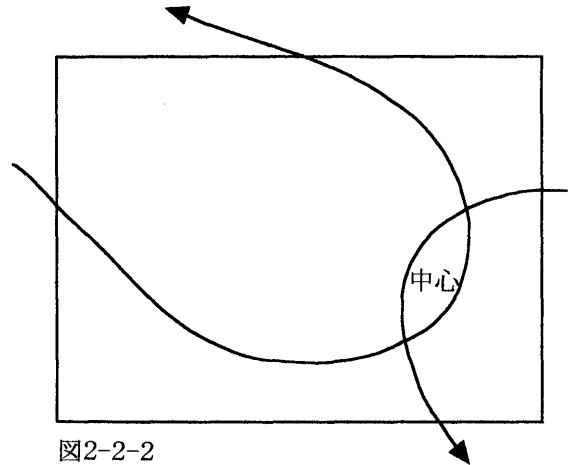


図2-2-2

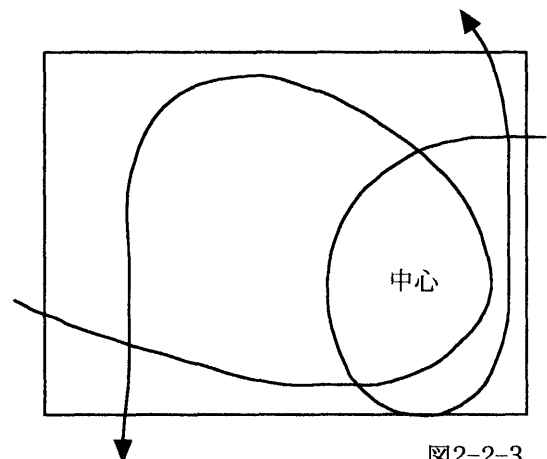


図2-2-3

3 セザンヌの視覚誘導

3-1 作品「石膏像のある静物」

セザンヌは、近代絵画の父と呼ばれるように20世紀絵画へ大きな影響を与えた作家である。セザンヌは「私が見るのではなく、風景から迫ってくる。」と言ったように、作品「石膏像のある静物」（図3-1-0）は、遠近法を打ち破り、面が立ち上がってくるような迫力がある。

この作品の石膏像だけを取り出してみると、画面の中心に置かれているために変化の少ない構成となる。また、石膏像の向きが右側を向いていることで、右への動きが生まれるため右側の空間が左側に比べ狭い感じがする。この作品の大きな特

徴である、せり上がった床が画面に加わることに
より、大きな動きの力(図3-1-1のH)が、右上から
左下にのしかかってくる。今にも床から転げ落ち
そうな果物や静物は、中心に描かれた石膏像の右
側に動きだそうとする力であるAによって支えら
れようとしているが、床の動きの力であるHの方
が石膏像より上回っている。その力を受け止めて
いるのが、B・C・D・Fの左斜め向きの動きとE
の右斜め向きの動きが作り出す壁とGの右側への
動きである。これらの動きのどれ一つを取り除い
てもバランスが崩れてしまう張りつめた緊張感が
ある。

図3-1-2は、視覚誘導の動きを示したものであ
る。力関係を示している図3-1-1に似通った図で
あるが、二つの図を較べると不安定な動きを安定
させるバランスの中に視覚を誘導させる動きがあ
ることが分かる。

図3-1-2の視覚誘導は、まず、視覚誘導の入口
であるIから布、果物を通り、右下方向へ視覚を
誘導される。Jで画面から少し出て、ここから出
口であるMに向かう誘導と果物、石膏像を通り上
へ誘導する二つの道に分かれる。主道である上へ
向かう誘導は、Kで再度、画面の外に出てから、
画面内に戻り、描かれたキャンパス、果物、立ち上
がる床を通り、視覚を右上から左下へ加速を持ち
ながらLの出口へ導く。

Iから美しい曲線を描きながらLに至るまでの動
きは、見事なまでに心地よい視覚の誘導を作り出
している。また、JやKに見られる画面の外に出て
から画面内に戻ってくる視覚誘導は、実際の画面
より画面を大きく見せる効果があり、作品にのび
やかな大きさを持たせている。

この作品のモチーフの形や色彩、タッチなどを
見ると表面的には、淡々と描かれているのだが、
強い表現を感じさせる。それは、画面構成だけで

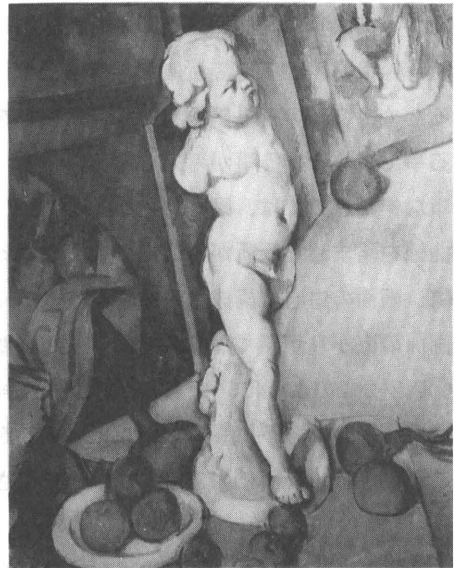


図3-1-0

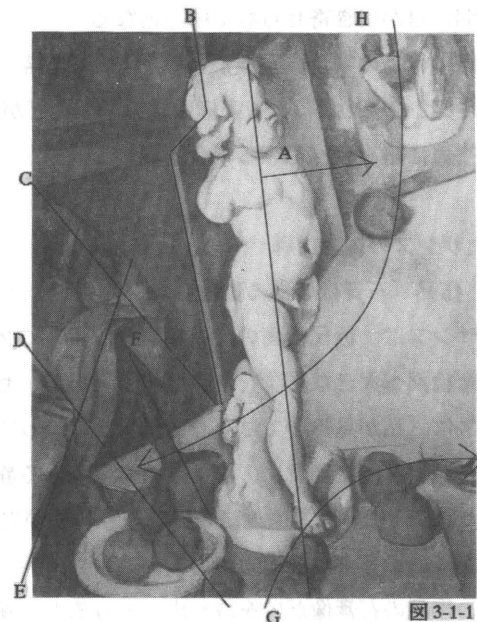


図3-1-1

感情的なうねりを強く感じさせる画面に仕上げているとも言えるであろう。

3-2. 作品「黄色い椅子のセザンヌ婦人像」

この作品（図3-2-0）は、1963年制作のセザンヌ婦人を描いたものである。

図3-2-1は、この作品の力関係を示したものである。人物の中心線であるAを見ると強い傾きがあることが分かる。それは、人物が右に倒れてしまう不安定さを示している。その右への動きaは、Bのカーテンによって、右上へ、更にCのカーテンによって、左上へ導かれる。そして、Dの壁を伝わり画面の外に力を出していく。

図中のa・b・c・dの動きは、不安定な力を画面の中でうまく動かし、力を安定させている。このような動きによって、画面は、緊張感を持ちながらもバランスの取れた構成となっている。

図3-2-2は、視覚誘導を示したものである。誘導の線は、E~F、G~H・I、J~Kの3ヶ所が探し出される。

Eを入口としてFを出口とする誘導は、図3-2-1で示された力関係の動きと重なりあっている。右下がりの床の線に沿って誘導された視覚は、カーテンによって、左上へ誘導され、画面の外に出てから左の壁を伝って、出口Fへと導かれる。

Gを入口としてHとIを出口とする誘導も左から右への力の動きによって、女性のスカートから椅子の背もたれを伝い、右上に登り、女性の肩から右手に導かれ下に向かう。ここで、そのまま下に向かい、出口Hに導かれる誘導と右手から左手を伝い、円を描く動きの二股に別れる。円を描く動きは、左手から背景の壁を伝い、一度画面の外に出てからカーテンの形に沿いながらIの出口に導かれる。

Jを入口としてKを出口とする誘導は、E~F、

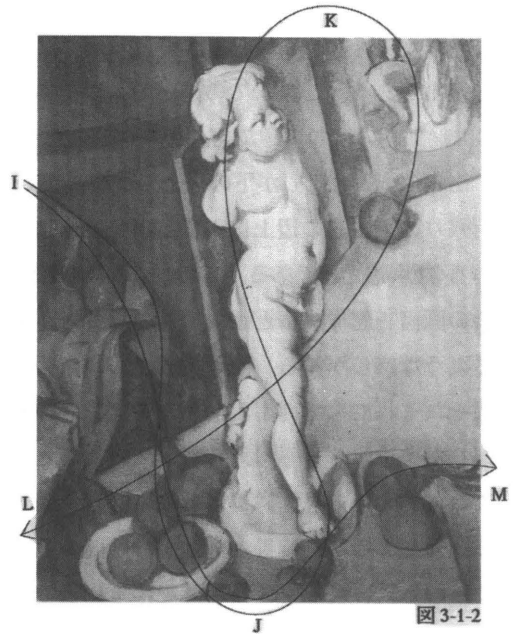


図3-1-2



図3-2-0

G-Iの円を描き交差する視覚誘導と比べると単純なU字形の誘導であるが、画面作りの上では、重要な役割がある。これまでの誘導の入口であるEとGは、画面の四つの辺で言うと左の辺上に位置し、出口は、F・H・Iが下の辺上に位置している。残りの上と右の辺上に入口と出口を作り出しているのが、JとKである。このJとKが、無かった場合の画面を想像すると画面のおおらかさが減少するような感じがする。画面構成上、画面の四つの辺それぞれに視覚の出入口を作る事は、画面の広がりが生まれるとも考えられる。

これら、3つの視覚誘導により、複雑な動きを持つ画面であるが、背景と女性が、画面の中で上手く絡められ、美しい視覚誘導を作り出している。

この作品を表現と構成の関係で見ると、描かれている女性は、無表情で感情を外に出す事はしていないが、画面全体からは、感情的な表現を感じさせる。女性が、右に大きく傾く不安定な画面構成をあえて作り出すことで、女性の内面を構図の中で表現しているようにも見える。寡黙そうに見えて内面性の強い作品である。

3-3. 作品「大水浴」より

セザンヌ作品の題材は、「静物」、「風景」、「人物」に分類されるが、初期の作品を除き、どの作品も実際の物を観察して描く写実的な作品である。しかし、「水浴」と題された作品だけは、生涯描き続けたイメージ画である。バーンズ財団所蔵の133cm×207cmの大作「大水浴」(図3-3-0)もその一つである。

この作品の特徴は、右側に描かれた大きな木が左側に傾き不安定な力を加えていることである。図3-3-1は、この作品の力関係を示したものである。左下に向かう力には、AとBがある。Aは、左

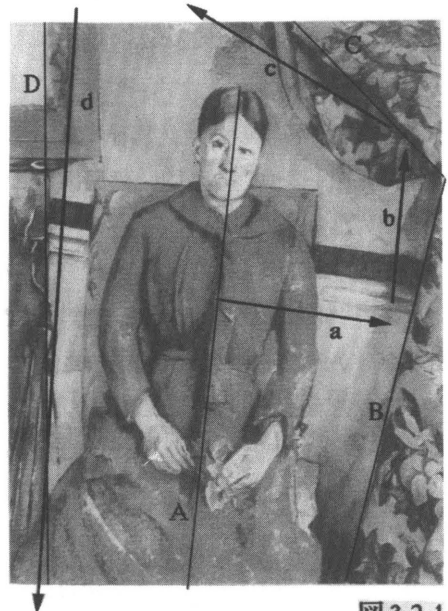


図3-2-1

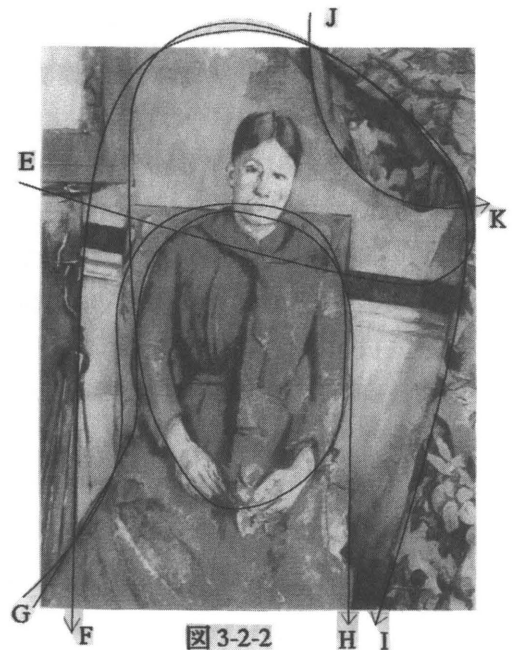


図3-2-2



図 3-3-0

へ大きく傾く木とその木に寄りかかる人物1によって、大きな加重を掛けている。Bは、大きな力ではないが、人物6の動きによりAと同じ方向へ力を掛けている。

それらに対して、逆の動きである左側から右下に向けて力を加えバランスを取っている力が、C・D・E・F・Gである。CとDは、左端の人物8が歩く方向に、右への動きがあり、その動きを助けているのが、人物8の持つ布や背景の木の動きである。Eは、左端の人物8とその隣の人物6と7が、雲の動きと呼応して生まれる動きである。Fは、人物4と2の形から、Gは、人物3と2の形から生まれる動きである。

この図を見ていると激しいAの力に対して、C・D・E・F・Gは、なだらかに逆の力を加えて画面の均衡を取っている。Aに近づくほど、逆の力は強さを増している。特にFとGは、左に傾く木に対して、支え棒のようにも見える。画面全体の雰囲気も激しい感じの右側に対して左側は、穏やかな感じが漂っている。

図3-3-2は、視覚誘導の動きを示したものである。それを見ると大きくは、U字形の2つの動きが交差しているのが分かる。

一つは、右下Hを導入口として、木の左側への動きを伝い、人物8・7の形を通り、Iを出口とする動きである。もう一つは、左上のJを導入口として、左端の木を伝い、人物8・7・6やバスケットや犬、果物などを通過して、人物2・3・4を通り、右上のKを出口とする動きである。

この視覚誘導は、画面全体をU字形に大きく流れる曲線であり、大らかな美しい視覚の動きを作り出している。

これまで紹介してきたセザンヌの作品と比べて構成上の違いが明瞭なのは、四角の角の強調である。視覚の動きは、H・I・J・Kともに四つの角周辺を中心とした場所から出てきている事や描かれている形も角を区切るような線が見られる。これは、自然を描く中からは、現われにくい現象であ



図 3-3-1

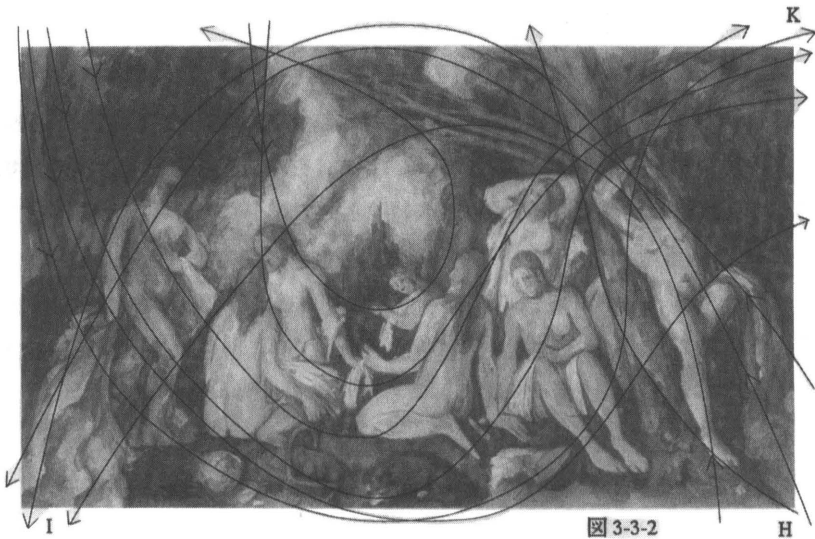


図 3-3-2

り、イメージ画の中でセザンヌが試みた構成上の分割方法であるとも考えられる。

視覚誘導（図3-3-2）における四辺の強調や力関係（図3-3-1）における右から左、左から右への力のバランスの取り方から考え、作品に対角線を入れたのが、図3-3-3である。左上角から右下角への力の移動と、右上角から左下角への力の移動が単純明快に示されている。対角線の交差した点が、画面の中心となるが、そこには、小さく描かれた人物（図3-3-1の中では5）がいる。この作品の視覚誘導は、大きなU字形の交わったものであるが、交わった空間に作品の中心があると「2-

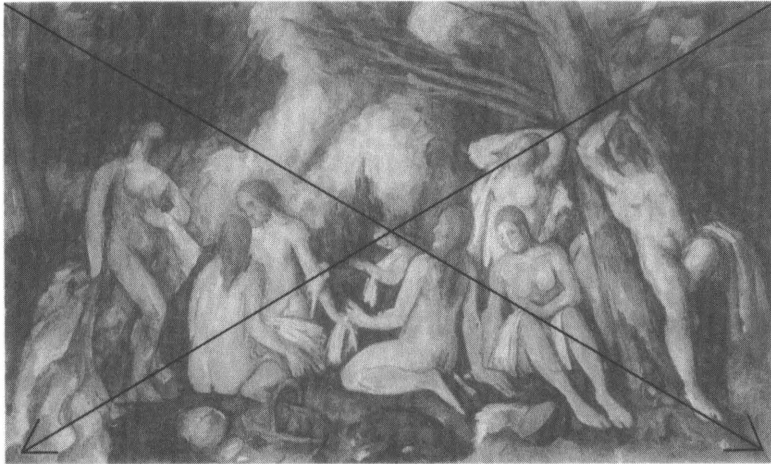


図 3-3-3

2.視覚誘導の応用」で説明したが、その空間の中心に位置するのも、この人物5である。普通、画面の中心に作品の中心を持つてくると作品が息苦しい感じになるのだが、そんなことを感じさせず、逆に大きさを感じさせる作品になっている。ここにも、構成におけるセザンヌの試みがある。

4.おわりに

今回は、セザンヌの作品を使い、画面の不安定な要素から画面中の力関係と視覚誘導を示し、構成について研究した。この中で示したことを制作と鑑賞に分けてまとめてみる。

制作に関しては、画面構成で作品に緊張感を与える又は感情表現を強める場合、不安定な力を大きくする必要がある。その不安定な力に対して画面のバランスを取るためには、作品「黄色い椅子のセザンヌ婦人像」で示したように不安定な力を画面の中で動かしていく方法がある。これは、その力の動きが、そのまま視覚誘導の動きにもつながっている。また、「大水浴」で示した不安定な大きな力に対して逆の力を加え、バランスを取る方法もある。この場合、力関係と視覚誘導を同時に考えながら制作することで画面の中に美しい動きを作り出すことができる。

鑑賞に関しては、画面構成によって、作品の印象が大きく違ってくることがあげられる。作品「石膏像のある静物」は、描かれているモチーフに感情的要素は無いのだが、画面全体から強く訴えかけてくる表現を見る事ができる。これは、過度の緊張状態を画面の中で作り出した結果であり、セザンヌが示したかった感情なのではないだろうか。このように、表面的に描かれる形だけでなく、構成によって人間の強い感情を示すことができる、一つの例でもある。このことは、作品の根本としてある構成をしっかり見つめることにより、作者の意図する何かをつかむ切っ掛けとなるであろう。このような作品の鑑賞方法により、違った面での作品理解の助けとなればと考える。

これからの研究であるが、今回の画面構成研究を基にして、構成と視覚誘導の研究を更に広げていくつもりである。また、構成と感情表現との関係についても同時に研究したいと考えている。

参考資料

図3-1-0.1.2 「石膏像のある静物」 Courtauld Institute Galleries発行ポストカード

図3-2-0.1.2 「黄色い椅子のセザンヌ婦人像」 美術手帳No.777：特集 新セザンヌ解剖学、美術出版社 P22(1999)

図3-3-0.1.2.3 「大水浴」 ホール・セザンヌ画・文、山梨俊夫訳：セザンヌ絶対の探究者、二玄社 P33 (1997)